

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.94 2013年6月号

大阪の橋下徹市長による従軍慰安婦などに関する発言が最近ずいぶん話題になっています。橋下さんご自身は従軍慰安婦という存在を容認していないけれども（とご本人は発言されています）、戦争という極限状態では、そういう存在が必要なことは誰だってわかる、という発言です。また、沖縄に駐留するアメリカ軍兵士による性犯罪がたびたび発生することを問題視した橋下さんは、そういった犯罪を減らすために風俗業を活用してはどうかと、アメリカ軍側に提案したことも話題になっています。ただ、こちらは不適切な発言だったと、発言そのものを撤回して謝罪しています。

この問題は、橋下さんの発言による問題提起の部分と、発言そのものに含まれる問題とを別々に考える必要があると思いますが、ひとまず、問題提起の部分は今回考えないことにします。すなわち、過去の歴史において日本軍が従軍慰安婦という「制度」に組織的に関与したのかどうかということと、日本以外の各国の軍隊がそういうことを行っていないのかということ、そして、行っていたとすればその是非については考えないことにします。沖縄の在日アメリカ軍による性犯罪を減らすための手段として風俗業を活用することの是非も今回は考えません。

従軍慰安婦が必要だったかどうかということの特に関心を持って見るとき、橋下さんの発言を女性蔑視だとか、人権蹂躪だとかという批判をすると、以前の橋下さんの反論にあったように、「建前論を言うな」という反撃を受けることになります。すなわち、「きれいごとを言うな」ということです。もしそういう極限状態に置かれたら多くの男性が同じ行動をとるはずだ、あるいはそういう行動に理解を示すはずだという考えが根本にあるのだと思います。でも、もし本当に心の底でそういう考えを持っているのだとすれば、そこにはやはり根本的に思いが至っていない部分があると私は思います。それは、もしも自分の娘や妻、恋人、友人や職場の同僚その他大切に思っている女性が従軍慰安婦にされたら、その男性はどう思うかという視点です。

どんな女性にも家族や恋人、友人など、その人を大切に思っている人はいるはずで、自分の大切な女性がそういう目に遭うのは許せないけど、アカの他人の女性だったらやむをえないというのは、あまりにも身勝手な気がするのですが、みなさんはどう思いますか？

